



office空と海
平井 吉信

中小企業診断士

平井吉信 コーナー

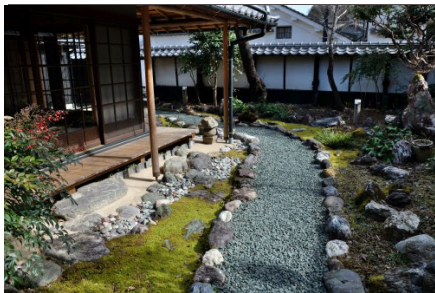
高知県佐川町 牧野富太郎博士の故郷で一足先にやってきた春の妖精を見る



高知県佐川町^{さかわ}は特別な
雰囲気を持ったまちである。高知の田舎にあって、
高知の匂いがしない。子弟
の学問に力を入れ、歴史
や文化が幾重にも重なっ
ている。鄙びた味わいさえ
風格や落ち着きを感じる。
思索にふけるのも散策を
愉しむのもまちの距離感
が心地よい。高知県内で
住むとしたら、ぼくは佐
川を選ぶ。

最初に佐川ゆかりの人
を知ったのは森下雨村。四
国の川を語るとき、知ら
ずに通り過ぎることはで
きない。釣り文学の先駆
者であり、「猿猴川に死
す」のような風景がかつて
の四国にあったことに羨望
を抱くけれど、いまとなっ
ては失われた原風景を心
のいたみとともに懐かむ
だけ。仁淀川の鎌井田地
区の情景、吉野川上流の
桃源郷のような風土など
惜しんでもあまりある。

高知西南部からの出張
の帰り、須崎西I・Cで降
りて須崎市内から峠を越
えて佐川へ入る。今回は仁
淀川へ行くのが目的では
ない。横倉山でもない。



区を歩いてみようというの
だ。
生家の周辺には観光案
内所、酒蔵などがあって、
つくりものではない昔なが
らの由緒あるまちなみが
たえずむ。
西から辿れば、生家を
復元した牧野富太郎ふる
さと館、佐川文庫庫舎、旧
浜口家住宅（観光協会）、
名教館、司牡丹酒造、旧
竹村呉服店、竹村家住宅、
まちの駅と続く。完全予
約制のウナギ料理の老舗、
大正軒もある（森下雨村
のエッセイには酒造所から
流れ出す栄養分を柳瀬川
のウナギが食べるので旨い
と書かれていたような記
憶がある）。

観光協会から山へ手折

ると、博士が幼い頃遊んだ金峰神社、美しい庭園を持つ青源寺、そして山野草を愛でる人にとっては癒される場所、牧野公園がある。

車を止められる場所は少ない。週末であれば、佐川町役場に車を停めて歩くのが適当。それでもまちなみを歩いていけば5分ぐらいで着いてしまう。

佐川町の名前の付いた植物、サカワサイシンが佐川町のシンボル。牧野博士が佐川で発見した植物。

今回は時間の関係で涙を飲んで行き先を絞りこんだ。というよりもこの季節、牧野博士ゆかりのあの白い妖精を見たい。



その昔、牧野少年は裏山の金峰神社で一日中植物を見て遊んだという。その至るところで咲いていたのが、白い梅のような小さな花を咲かせるバイカオウレン。標高の高い剣山では5月上旬といわれているが、ここでは平地でしかも2月に咲く（厳密に言う、バイカオウレンの四国固有種、シコクバイカオウレンというらしい）。

バイカオウレンはまだ見たことがないし、どこに咲いているかはわからないけれど、まずは歩きながら探してみようと思った。金峰神社の坂を見上げる。階段の奥はほの暗い。かごめかごめの歌詞を思い出す。

かごの中の鳥は何時出られるのか？ 子どもの遊びのわらべうただがその歌詞の意味はまったくわからない（子どもの頃、近所で遊んだものだが）。戯れか、深い意味を秘めているのか、気まぐれなお大尽の遊びか、民族の語られない裏を比喩しているのか（蘇民将来伝説など）、はたまた暗号を宿しているのか！。

とおりゃんせの歌詞とともに聴く人を深い迷いと幽玄に誘う。金峰神社の階段はそんな雰囲気さえ感じる。でも家の裏にあったこの神社を牧野少年は息をはずませながら駆け上がった。そこには宝物があったから。



冬から春にかけて佐川周辺の里山では、白い梅の花のような小さな植物が地面に咲く。夢見心地で焦点が薄れていくと（百五十年の昔）兵児帯を締めた牧野少年が腰をかがめて夢中になって見つめる様子が浮かんだ。

ここは佐川、牧野富太郎のふるさと。春を待つ白い妖精、バイカオウレン。

牧野公園から歩いて駐車場へ戻る途中、観光案内所の若い女性スタッフとすれちがった。
「どうでしたか？（バイカオウレンは）見えましたか？」
「ありましたよ。踏まないように注意しながらしゃ

がんで見ました」
「よかったですね。私、まだ今年は見たことがないんですよ」
笑顔の余韻が残る佐川のまちなみを踏みしめながら、いにしえの人々の営みを追体験すれば、平成の土佐路を東に向けて徳島をめざした。

